

山とスキー

山別群

第三十八號



札幌山とスキーの會發行

大正十三年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年五月三十日印刷納本
大正十三年六月一日發行（毎月一回）
（一日發行）

第三十八號目次



記事

山上の思索

山への想片

ステムターンに就ての考察

山地に於けるスキーの實際

蘆別岳

生命 (詩)

彙報抄録

圖版

針葉樹

東面より見たる蘆別岳

(一)

(二)

(一四)

(二三)

(三四)

(三三)

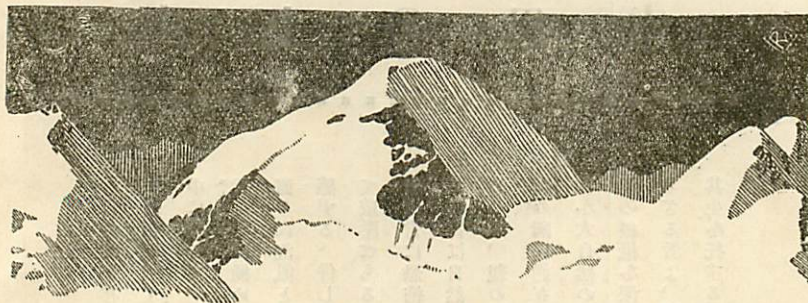
大正十三年六月發行



針 葉 樹 生

山の上の思索

自分は全存在の根柢を脅かして殺到し來る自然の威力の前に戰慄し乍ら、自分の生活の如何に宇宙の眞相に徹すること淺く、漂蕩し、浮動し、兒戯し、修飾する生活であるかを思つた。此大宇宙の中に在つて、自分が自由に快活に呼吸し得る空氣、自分の生活が眞正に自己の領域として享受し得る元素は極めて少い。一度家庭と朋友との團欒を離れ、一步を都門の外に踏み出せば、自分の情調は直ちに混亂と迷惑さに陥らざるを得ない。今大自然の威力と面々相接して自分は頻りに自我の縮少を感ずる。併し此惡情を征服して大自然と合一すること能はざるが故に、換言すれば生死を度外に附して威壓せらるゝの自己を威壓するの自然と融合せしむること能はざるが故に、自分の意識を占領する者は常に恐怖不安矛盾の情調であつて崇高の感情は遂に成立しないのである。自分の嘗て經驗したる崇高は自然と面接して其威力と融合し得たる確偉なる先人の魂を掩堡として、藝術品の影に身を潜めつゝ、親の手に纏り乍ら僅かに怖ろしき物の一瞥を竊む小兒の如く、辛うじて近き得たる矮少なる影の國に過ぎなかつた。眞正に崇高を解する者は、換言すれば眞正なる崇高の創造者は、自己の全存在を大自然の前に投出して其威力と親和抱合し、其威力と共に動き共に樂む者でなければならぬ。生活の根柢を深く宇宙の威力の中に托する者でなければならぬ。嗚呼我が魂よ、汝根和抱合の歡喜を知らざる者よ、汝根柢に到らずして、浮薄の如く動搖する迷妄の影よ、肆意にして貧弱なる選擇の上に其生を托する不安の子よ。汝の道は遠い波の道は遠い。



山への想片

大 島 亮 吉

山登り云ふものに對しては、私のごときものは未だ極めて幼稚なる途を歩みつゝあるものであります。而してこの私等のごときものに對して、既に古く、十六世紀の半ば頃より今日に到る迄、幾多の山々を登り、而もそれに對しては幾多の重厚な、而も穩かな、或ひは鋭い想ひを寄せ、そのまゝにその心胸深くに秘めて、何ものも今日の私等に残さず去つてしまつた人は實にたくさんにあることだらうと思はれます。而しました、それ以外にも多くの人が、この山登りと云ふものに對していろ／＼と書き残していつて呉れてゐます。けれども、これらのものは主として山登りに就て直接必要な、例へば山の地誌的方面に關する山岳誌 (orography) や、山を登る直接の手段である技術的方面のことや、それに附随する其他のことに就て書かれたものが多いやうでありまして、これ等を山登りの有形的な、物質的な、形而下的の方面とでも言ひ得ますれば、これに對して無形的な、精神的な、形而上的な方面、これを言ひ換へますれば、これらの人々が山へ對してへの思想的なもの、更に一語でよく言へば所謂山登りの "Idealistic" に就て、これを書いたものは、前者に比しては全く比較にならない程、その量に於て尠いものであるやうに思はれます。このことは山登りと言ふものを多少でも解し

てゐるものには直ちに首肯せらるべきものでありませう。私のごまきが言ふまでもないことであります。

さて、私等が例へば山登りの技術のことや、或ひは單なる紀行文などや、時たまに書かれた感想文などを讀んでゐる間に、よくそれらの人々の山へ對して抱いてゐる想ひや思索の片々が私等の眼にふれることがあります。私等はそれらのものに依つて、また技術や山岳誌的な知識のほかに、深く／＼山そのものゝ、單なる肉体的な視覺に映する以外の姿を觀ることを教へらるゝことがあります。これから私は、いさゝか私その方面に就てそれ等のものに依つて教へ導かれたり、また感じさせられたものよりして、多少現在の私等にとつて關係あることに就て、私の知る所を書いて、これに對する御高教をまらたいと思ひます。

さて、こゝに私が申しますことは、それならば主として何であるか言ひますに、それは敢へて申しますれば「登山思想の時代的變遷」とでも或ひは言ひ得べきものかと思ひます。また別の方で言ひますれば「ピークハンティングより靜觀的な態度へ」とも言ひ得るものとも思ひます。

私等のごとく若くしてわづか此頃になつて漸く山を登りだしたものには不幸にして一敢へて不幸と云ひませう。我國に於てさへ登山としての意味で最初にその頂を踏んだと云ふ所謂「初登山」または「初登攀」の名譽！これはその初登山者或ひは初登攀者以外の人より見てのものゝと喜悅を感じ得ることの出來ないことは、私としては遺憾なことであります。私はごく卒直な意味で、例へば現在の日本山岳會をつくられたお方たちが、日本アルプスの峯や頂を夏ごとに緊張してひみつたつゝ究め登つて行つた時代、アルプスの登山の歴史の上にはよく使はれる言葉をこつて言へば、征服して行つたその時代に、それらのお方が感じたであらうその純眞な喜悅と現在私等が感じ、認めるその功績に對しての名譽に就ては一種の羨ましさを感ずるものであります。純然たる「初登山」をなし得る山頂はもう我國にはない。歐洲アルプスにだつてない。ヒマラヤの大部分を除いてはこの地球の上のあらゆる大山脈に於ても「初登山」としてしがひのあるものは甚だ少ない。そしてそれらのわづかに残された未知未踏の大きな峯々に登るものはいろ／＼の點で制限せられてゐると思ふと私にはその點で一種の不満を感じないわけにはゆかないのであります。而しまた小さな我國だけに歸つてみますと、現在ではその日本アルプスを初めて登つていつたときからは、登山の上での事態は異つて「冬季初登山」とかを行つて、例へ

多少の相異はあろうとも、またかの最初の登山者が感じ得たやうな喜悅と光榮を感じ得る余地はあるのであります。またひとつの山頂を新らしいより困難な登路より登るに云ふ——これについてはまた後にのべます——やうな所謂「マンナリイ」に依つて始められた “difficult variation route” の主義や案内者を連れないうで全くアマチュアのみで登るこれまた所謂 “*single climbing*” の點で「初登山」や「初登攀」に近いものもありますが、それは山が高く峻険しいアルプス位以上の山に於ては價値ありとせらるゝ所で、これを日本アルプスあたりで行ひ得る所は甚だ尠ないものと思ひます。

さて、この「初登山」^{フレストアップセント}と言ふことに就て嘗てアルプスに於ての登山者間非常に議論されたことがあります。即ち、それは丁度アルプスの峯々が殆んど征服されて終つたすぐ後の頃で、これを登山史上の例にして言ふと、登山史上の黄金時代が一八六五年のウインバーのマッターホルン初登山に終りを告げて、それに續いて第二流の頂、より困難な峯が登攀征服されてゐつた時代は一八七七年アルプスで最も困難で、その多くの登山者を失敗させ頑固に彼等に抵抗した峯であるドゥファイネのメージユが佛蘭西のアンリイ・エマニユエル・ボアロオ・ド・カステルノオ (Henri Emmanuel Bollaude-Castellan) に依つての初登山を最後には終りを告げた頃でありまして、この時期以後の登山者を今日の多くの登山史家は等しく「近代登山者」Modern mountaineer と呼ぶに對し、それ以前の登山者を「初期登山者」early mountaineer と「開拓者」Pioneer との二つとしてゐます。で、その「初登山」に就ての登山者間の争論はこの近代登山者の間に起つたもので、それは實に開拓者のなしたその初登山の功績に就てなされたものであります。この争論のためになされた種々なる登山者の所論の背後には引いて私等にとつていろ／＼と考へさせらるゝものがあると私は思ふのです。ですがそのすべてに亘つて私はこれを知りもしないし、また長くて書くことも出来ない故、ごく簡單に私の考へだけでその所論を對立させてその幾分を示したいと思ひます。

最初は「初登山」と云ふものゝ功績を否認し、それを無意義とした一部の人々の所論ですが、この所論なるものが當時たゞある登山者の間で言はれて居つたことにすぎないで、決して個人／＼の明らかなものものとして文献に表はれたものではないかの如く私は想像致して居りますが、確かでは勿論ないことです。でその「初登山」の功績否認、無意義となす所論を概括して申しますと

「往昔、最初にある山頂を究めた登山者等は多くは、その山の頂に達するためには最も容易な途をえらんで登つた。今

日の登山者は彼等のこつた最初の途よりも數倍も困難な他の途を登つてゐる。彼等の時代より吾等の登山の技術は進んでゐる。而しその後に登られた新しい途の困難は正にそれに比しても倍以上である。あるひは言ふであらう、彼等は全く未知の不安と云ふものに打ち勝つたのだと。されどより困難な新らしき途にもまた未知の不安はある。吾等も彼等との間には時の相異ありて、たゞ彼等が「初登山」の名譽を得たのみ。登山の發達のために彼等は全く偉大なれど、特に「初登山」なるものをさまで價値づけることの必要を認めぬ。「初登山」は正に「初登攀」もその相異なし。時の順序がその順序となるのみ。

と言ふのがその大要と思ひます。これらの所論は一應尤も思ひますが、よくみれば全く一種の論辯に等しきもので、多くの他の登山者から排斥をみたのも當然であると共に、第一すでに登山に就て價値とか名譽とかを論ずる點でも、後世の登山者の考へとは全くかけ離れてゐるもので、このことは他の機會でのべました。彼等からは全く一顧もせられざりしものでありましたでせう。而し當時に於てもそれに對して直ちに多くの辯護をなした所論がありましたでせうが、私は未だこれをその當時の文獻のなかに見出し得ないのであります。たゞこの時よりすつと後れてからの所論の一部をこゝにのせてみますと、かの伊太利のギドー・レーはその名著「マッターホルン」The Matterhorn のなかでそのことに就て言つてゐます。即ち彼はその著の一章「征服者」のなかに、彼のウインバーがデオルドノとカールレルとにわづかに先立つてマッターホルンの初登山の榮譽を得んとしたときの前、デオルドノやカールレルにその勝利を奪はれやしなやかと懸念しつゝ登つてゐたときのことを書いて

「丁度その當時私が居て、彼れウインバーと同じ地位にあつたのならば、又私も同様にウインバーと同じやうな心の平靜を感じ得ず、彼等デオルドノ、カールレルに對する懸念から逃るゝことが出来なかつたであらうと考へたことは、今思へば甚だ自らに對して恥しいことだつた。そして而も、山はその時から少しも變つてをらぬ。その時と同じ困難や同じ危険が、同じ途に私を待つてゐる。而し事態は私等に對して異なつてゐる。マッターホルンの不可登は破れた。謎が解かれたとき、スフィンクスは死んでしまふ。ある仲間の一人がある行動を最初になしとけるに成功したとき、たといその行動が案外たやすかつたにしても、而もそのまことの功名は最初にその行動をなしたもののよものでなければならぬ。彼はその行動を最初になして見せて、他のものにもそれをなすことが出来るこゝを示し、依つてそれがためその第二にな

したものと行動をすつと氣高くないものとなすに到るのである。あるひこつものを創作した技術家の熱望と大膽な企劃に對しては、その模倣者はたと心中の平靜と卑屈な獲得をもち得るのみだ。そして若しまた、その行動を他のものぐくりかへして、而もそれが最切のものよりより大なるもの、より完全なるものとなし得ようとも、矢張り彼は決して最初になしたものと味ふ喜悅をその享くべき名譽をもち得ないものである。これが非常にこれまで議論された登山のうえの問題たる「切登山」に就ての私の最初の小さな意見の發表である。(Guido Rey, The Matter horn, 1912)

と言つて、「初登山」なるひとつのバツションに對してこれを辯護してゐるのであります。これには甚だ興味深いものがある。私は思ふのです。而してこれに依つてみれば、前述した「初登山」と新らしき、より困難な途よりの「初登攀」に何等差異なしとする所論が覆されるものとするならば、實際の結果は全く多くの登山者の言に依つて覆されてしまひましたが、「初登山」の名譽を喜悅は矢張り「初登攀」のより大なる功績あるに於ても、それよりは、對人的な點を離れた點だけに於てさへ、登山者自らには價値あるものであることを知ることが出来るのであります。登山者として以上、今日に於ても「初登山」を求め、それがもう出来ないときは仕方なく「初登攀」を求めつゝ山々を歩く所謂純眞なピークハンターの氣持を尙多く有たねはならぬと主張する人の出て來るのも當然首肯されねばならぬこととあります。この點に就て、ひとつふたつの登山家の言ひましたことをみてみませう。

そもこのピークハンティングと云ふことに就ての所言をなした登山家のひとり、有名な人は佛蘭西生れのエミール・ジャベル(一八四七—一八八三)であらうと思ひます。彼は佛蘭西の數少ない登山家のうちで最も登山の歴史の上では有名な人で、時代も近代登山者の先蹤者たるの地位に置かれる人であります。彼の一八八六年に上梓された遺著『あるアルピニストの回想』は佛蘭西に於て山岳文學を打ち建てた最初のものである。現に山岳文學の方面にたずさはる佛國翰林院會員アンリイ・ボルドオ(Henri Bordas)がその序文に於て説く所であります。さてかれジャベルがその著のうちにて言ひたる、彼のピークハンティングに對する考察をみますに

「登山者がいまだ未知未踏の峯々を最初に登ることを好むと言ふことの理由は、その峯々を始めて登ることに依つて彼等がひとつの征服をなしとけ、自らの支配のうちに新しい領域を獲得することが出来る」と云ふことである。これは全く私等人間の本性に深く根ざした深い本能である。このことは既に屢々私等登山者の仲間では言はれたことではあるが

私もまたかく信ずるものである。而してこれは決して登山者が自らを他に誇るに云ふやうな意味のためになされるものではなく、全く自己自らに對してである。征服と言へば、それは自らの心に聳ゆる山の未知の危険に對する恐怖やそれを登る困難に對する勞苦を征服し、堪え忍んだものである。勝利と言へば、それは自らに對しての勝利であつて、山に對する勝利でもなければ、他の登山者に對する勝利でもない。深くして、抗し難き本能に依つて私等人間は絶えず身を引き上げ、登りゆくことを愛す。それ故、峯がより高ければ高いほど、より「曇を起さしめるほど急峻なればなるほど」そしてそれがより困難なればなるほど、その峯は登山者の永久に到達し得ぬ理想に近づいてくるのである。これが、なぜ登山者は常に秘かにより高き峯か、さもなれば地上に最も關係少なく空間に最も自由な聳えてゐる急峻な細身の峯を求めつゝある理由である。ある峯に對して勝利を得た後に於て、登山者は常にそのいまはより高く聳えてゐるやうに思はるゝかの峯に就て、數時間もいろ／＼と想ひに沈むことを愛するものだ。―君はいまだ嘗てこのやうなことをそのやうな時に於て數度も感じたことはないか？ (Emilie Javelle, Souvenirs d'un alpiniste.)

と言つてをります。即ちピークハンティングの心は登山者にとつては離すべからざるものであることをジャベルは言つてゐるのですが、これを一層高調して、「絶えず新らしき登攀を求めつゝある人のみが、まことの登山者である」と言ふやうに強く言つた登山家は有名なるかのマンマリイ(一八五五―一八九五)であります。即ち彼はその唯一の著「アルプス及び高架索に於けるわか登攀」に於て言ふに

まことの登山者は、またある意味に於て一個の漂泊者でなければならぬ。而し私はこの漂泊者を以て、恰かも英蘭土の踏みならされ、固められた坦々たる街道を疾驅してゆく自轉車旅行者の様に、山々をたゞその先蹤者の足痕のみを趁ふてさまよひ歩く様な漂泊者を意味したのではない。それは未だ人間の足痕の到らぬ、高き、清淨な雪を愛し求め、また人間の温かき指先の觸感を知らぬ岩の一片を掴むその知感に言ひ知れぬ喜びを覺え、或ひはまた、この大地が混沌のうちから築きあげられた時以來、絶えず雲霧と雪崩とに捧けられてあつた狭谷の氷の暗影を踏んで、一步／＼それを刻み登るこゝに飽くまで倦まぬ歡喜を享感し得るやうな人を意味するのである。

それ故、更に言葉を換えて言へば、まことの登山者は常に、絶えず新しき登攀を求めつゝある人である。またその成功すると否とを問はず、その山々のはけしき争鬪に限りなき悦びを得る人である。それ故に、風雪に削磨した

かの鋭い山稜のその滑らかな片岩や、峡谷の外へ張り出た様に思はるゝほど急峻な、蒼黒い水の面、そしてまた正しく刻まれた雪面のけはしい段階なきは、全く此等の人々にとつては生命の眞の氣息なのである。勿論此等のことを、私はこれを以て充分に分析し得たとも思はなければ、まして此等のことを信ぜざる人々に、それを明らかにし得たとも思はない。而しこれに依つて、此等のことが、幸福に對しては力あるものであり、犬儒主義的な思想のすべての痕跡をうちこはし、悲觀的な哲學のその根柢を動搖せしめ、おびやかし、以て吾等が若き血潮を常に吾等が血管のうちに高鳴らしめて呉れるものであることが幾分なりとも解せられたであらうと感ずる。」(A. F. Mumme, My Climbs in the Alps and Caucasus, 1895.) と言つてをります。彼の主張は強く鮮明で、またそれに伴ふ彼の登山の態度は實に立派なものでありました。後世の登山家の等しくそれは言ふ所であります。マンマリイの時代にはすでにアルプスに於ては初登山はほと終つてゐました。それで彼は例の「より困難な他の途よりの初登山」の説を主張し、同時に例へばマッターホルンに於て言へば、ウインバーの登つた瑞西側のヘルンリイ・リツヂよりも、またカールレルの登つた伊太利側のリツヂよりもより困難であるツムツト・リツヂを始めて登攀したのでした。

「眞の登山者は常に、絶えず新らしき登攀を求めつゝある人である」と言つたマンマリイのこの言葉に對して、同じ時代に親しい山友達であつて常にマンマリイに依つて導かれてゐた現存の登山家であり、現に英國山岳會の會長をしてゐるノーマン・コーリイは、これには少しちがつた見解を以て言つて居ります。即ち後者は前者の主張した *difficult variation route* の主義には反對してゐます。私は多くの高名な登山家のあるものが、登山者三眞に呼び得べきものをかくくものに限ると言つて、つまり登山者の地位をいろ／＼に區別することに就て依つてまた言ひかへれば、眞に山を登るものはどのやうな態度で山を登らねばならぬかと言ふことに就て、吾々のやうな未だ幼き歩みにあるものに就ては啓發せらるべきものが多くあるのではないかと思つてをります。それ故私はこの機會で、一八七〇年代より一九〇〇年代に於ての第一流の登山家であり、現在では過去の高名な功績に依つて登山家としての高き地位に於てあるノーマン・コーリイ教授のこの方面に關しての一つの考を氏が一九〇二年の著「ヒマラヤ其他の山脈に於ける登山」のうちの一章たる「失はれたる稿本よりの斷片」に於て觀てみたいと思ひます。

「失はれたる稿本よりの斷片—それはおそらくアリストートルの手になれるものなりと考證せらるゝもので、「競技に

就て「Peri athleticæ. K. T. I.」を題されたる、雅典の青年のスポーツに闘技の倫理的意義に關する論篇である。而してその稿本は主としてその當時に於て行はれたる競技による肉體的訓練の極度の分化的發達の缺陷とそれに對する希臘教育の採るべき態度との關係を論じたるものである。即ちその中に私は今日の登山なるスポーツに關聯して興味ありと思はるゝひこつのポイントを見出すものである。即ちそは言へらく、「理論的な教育者は、戶外競技はそれが精神にまで與ふる効果の點に於て單なる純然たる闘技よりも非常にすぐれてゐること、即ち換言せば、單なる過大なる肉體的の練磨とそれに對する注意のみを要求するが如きスポーツは、たゞ普通の体力とその危険に際しては大膽さと速かな決斷を、その困難に際しては機敏な方略に富めることと、耐忍とを要求するが如きスポーツよりは甚だその點に於て低く且貶れるものなることを識らなければならぬ」と。勿論今日に於てかの古き希臘の節度道德に遵ふことは難い。而し恐らく登山なるスポーツに於ては、その點が、他の多くのスポーツに於けるよりもより容易に今日の識者にまで看取されてゐることは事實である。なぜならばかの山々のなかをさまよひ歩くことを好むものは決して人々人とのある激しい競争に出會ふこともなければ、またあるめざましい行爲を爲したとて直ちに彼を圍繞する多くの觀衆の賞讃を享くることもない、それがため一般にそれに對しての過度な努力はこれを避けることが出来るのである。さてこれよりして、私等は山に登る者の態度の如何に就て、その正しき地位を究めねばならぬと思ふ。そして私はこれに關して、二つの兩極端の中間にあつて、値 *value* と云ふ語で最も適當に言ひ表し得るが如き程度に於て、山に登ることにまことの愛を有つものこそ、正しくまことの登山者であると呼び度いのである。

最初まづ山に登ることの愛に就てみるに、私はこれをアクチイヴな徳と呼ぶのが正しいと思ふ。ある人はそれはひこつの思索であると言ふが、それは非である。何故かと言へば、山に登るにはたゞ思索冥想を以てなすことが出来ないからではあるが、而してまた決して登山者の態度は全然能動的なもの、即ち身體的な單なる運動ではなく、その一部分は思索であり、冥想の境地であらねばならぬと、私は思ふのである。

さて、一般登山者のうちには、先に述べた山に登ることの愛に於て、それが未だ足らざるものと、正しい節度に於てそれを有するものと、そして最後にそれをあまり過度にまで有つものがある。而してその山に登ることの愛の足らざるものは、これを「山登りに眞の理解なき人」*irrational man* と「似世登山者」*Pseudo-mountaineer* との二つのいづれ

かである。詳しく言へば「理解なき人」とは望遠鏡や登山鐵道の手段で山を登らうとする人たちで、その登山の主意を問はれたとき彼等は、よく。自分の生命をロープの端に繋いで、それを殊更に危険に曝らすために、眞夜中や朝早く、星光の下の冷たい空氣のなかに起きて高き山上の岩と雪のなかへ出掛けてゆくやうな人々を非常に蔑み罵る。彼等は氣持のよく整備されたホテルのある山地でなければ行かぬ。そして其處で彼等は彼等の劣俗な食欲を満足させて、私等が「登山者」と正しく呼ぶ、山を登ることを眞に愛好する人たちの味ふ幸福のごく僅かを辛じて味つて、以て得たりとしてゐるのである。

加ふるにこの種の「理解なき人」は眞の登山者も似世登山者を識別することが出来ない。何故ならば彼等は似世登山者のつくつた登山の冒險談を丁度中世紀の旅人の譚のやうに聴いてゐるからである。似世登山者はだゞホテルの喫煙室にゐて、想像で山を登つてゐる。彼等はある高い困難な、而かも未だ人の登らざりしある峯をいかにして登りしかを設けつくつてそれを他に語り、或ひは詩句に多くの山の名をとりいれたりする。而も他のものゝなしたものを自らのなしたかのごとくに言ひ表す。それ故彼等は一種の邪惡な墮落した人々である。「理解なき人」もまたこの「似世登山者」も共に、山を登る眞の悦びから遠くはなれた誤まれる途に迷つてゐるものである。而して山に登るここの愛を極端に有つたもの、即ち無暗に山を登らうとする望みを有つてゐるものは、私はこれを「登山狂」と呼ぶ。彼はこの山を登ることに肆欲なるものである。彼は最も山が我々を拒むこととすくなき線に沿ふてこの山々を登ることに注意をとめず、殊更に山の悪い側から山々を登るものである。そしてまた若しも彼がこゝに未だ何人にも登り得ざるある岩の光峯があるに聞いたとき、彼は直ちにそれを登らうとする非常に強い望みに促はれてしまふやうな人である。彼は山を登るここのその愛を愛するがために、その峯を登らうとするのではない。これまでの記録を破るためや、或ひは相手を打ちまかすためや、或ひはまた自分の名が地方の新聞に表はれんかためや、單なる卑しい望みのためにそれを登らうとするのである。而し「登山者」とはこの山を登るここの愛を正しい限度に於て有つものである。彼はたゞ山を登ることそのみに悦びを感じてゐるものである。決してその丘を登り、こゝの山を登ると云ふここの悦びを有らほしめない。彼は山から山をさまよひ歩くことや凍れる雪に蔽はれた高き峯々を登攀することのみを愛する。そしてこれらのことは彼にとつて大きなつぐないあることである。風洩る山上の牧場小屋、岩のもと、雪や風、霧や或ひは雨のなかで過ごされた數々の夜

にも彼は忍び堪える。一人の人間の力にては打ち勝ち得ない困難のためには、友の生命と自らの生命をロープで繋ぐこともする。そして尙また彼は、山々をさまよひ歩かんがためには、その山々の間の谷々に住む頑丈な質朴な山人の力を藉りて、そのためには多くの金を敢へて支拂ふ。斯して彼は山々のあらゆる事象と状態とに就て、その時々によつて平常の數倍にもなる山のいろ／＼の危険と勞苦に就て、それに處する知識と力とを得るやうになるのである。そして若しも不幸にして彼の山に登らうとする望みも、そうなさしめる機会とが不調和となつてゐる時に於ては、彼は山々に就て思索したり、地圖の上に赤線を引いたり、或ひは彼の是迄に得た知識經驗を書き述べて、以てそれがために他の登山者をして利益せしめるやう、その閑暇を過すのである。(J. Norman Collier, Fragment from a lost M. S. — Climbing in Himalaya and other mountain ranges, 1902.)

以上の如くこの様にまで突こんで明らかに、この様なことを書いた登山家は甚だ少ない様に私は思ひます。登山者は多くはこのやうな登山に於ての所謂 *Moral side* に就ては、甚だ沈黙的であるやうです。私等は多くの登山者からこの方面に就てはごく僅かのものをしりか聽得ないのです。それはとにかくこのコリーイ氏の所言は確かに吾等山に登るものゝさるべき態度に就てのひとつの見解を與へて呉れてゐます。ノーマン・コリーイ氏は所謂モーダン・マウンテンアートのひとりではあるものゝ、その實は、私の思ふ所では、非常に現代の登山者の大部分の傾向に、その態度は似てゐる所があると思ふのです。

「近代登山者」の主なる人々をまつマンマリイを始め、ルドウイツヒ・ノルマン・ネルダ(一八六四—一八九八) Ludwig Norman-Neruda や、ルドウイツヒ・ブルツチエラー(一八四九—一九〇〇) Ludwig Purtscheller や、或ひはエミール ツイグモンディ(一八六一—一八八五) Emil Zsigmondy マルチノ・バレットチイ(一八四三—一九〇五) Morino Baratti ルウイツギイ・ヴァツカローネ(一八四九—一九〇三) Luigi Vaccarone クートリツヂ(一八五〇—) W.A.B. Coolidge など其他數多くの人々を數へることは出来ませうが、こゝではその最もチピカルな人として、これまでいろ／＼この名をあけて來た關係上、マンマリイを推して置きます。マンマリイは勿論いろ／＼新しい登山に對する見解を主張しましたが先こゝでは他のこゝを置いてたゞ一つ彼はピークハンティングと言ふことを最も強く主張したと云ふことにとどめて置いて言ふことゝしますと、彼は「まゝこの登山者は常に新しき登攀を求めなければならぬ」と言ひ、そして彼の時代に於て

はアルプスにはもう殆んど初登山を行ひ得るやうな大きな峯々は非常に少なくなつてゐたので、彼はそこで「より困難なる新しき途よりの初登攀」の主義を主張し、また實際アルプスに於ては數多のこの「より困難なる新しき登路」を開き、更に尙も新らしき山頂を求めめるためには高架索へのき、或ひはヒマラヤへと志して終にそこで山のためにその生命を終へたほど、その主張した主義なるピークハンティングのために自らその範を示しました。彼が登山史上でのひとりの偉大なる登山家であることは今日の如何なる登山家も言ふ所であり、彼の有つてゐたその登山の精神なるものもまた今日まで多くの人にとつては大いなる啓示であつたであらうと思ひます。けれど時の進むに従ひ、登山の途の發達するに従つて、事態は必然變りゆかねばならぬものでありませう。アルプスに於てはいかなる小さな、またいかに遠くかけ離れた處にある峯々も登り盡され、新しい登路を求めつくしつゝゆきて、今日ではこの新しい登路よりの初登攀の記録は次第に三少なくなつてゆくのは、既に私等にとつては洵にみやすき事實であります。新しい山頂を登るためにはアルプス以外の大山脈へ行かねばならない。斯して高架索、ヒマラヤ、北極のスピッツベルゲン、加奈陀ロツキイ、アンデス、アフリカやアラスカの諸高山、或ひはニュージーランド・アルプス等歐洲以外の諸大陸へ、また近く歐洲のみで新しき山地を登るためにはアルプス以外の歐洲の諸山地、例へば諾威の山々、ピレネー、コルシカの岩山、或ひは少しく離れてバルカンの諸山脈へも登山者の足跡はほど印しつくされてしまつて、たゞ尙ヒマラヤだけが地上最高の峯エヴェレストを始め數多くの高峯を残して獨り今尙未踏の微岸な容をしてゐるだけあります。假令へ登山者はみな熾烈なピークハンターの心はもつと云へまゝ、觀的にみて何時かは登るべき新しき頂もない時が來るのであらうし、また主觀的に言つて登山者自らの種々なる事情のもとに終始してピークハンターとして山を登りつゞけることは出來ない筈でありませう。こゝに到つて一度登つた山頂も客た再び登りかへされねばならない時があるでせう。その時に於て登山者は、もう過去のピークハンターとしての心では再び山を登りつゞけることは出來ないわけです。そこに於て自ら山の登り方、或ひは見方に就てある變化をみなければならぬわけではないでせうか。例へばアルプスではこゝに於て山の登り方にはこれまで夏のみが多くであつたが、冬に春に秋に、そしてまたスキーを使用しての登山に、或ひは岩登りを主とした所謂よく *Klettertour* なぎ言はれてゐる様な種類の新しい山の登り方が、可成以前より行はれて現在に到つて居り、また山を登る登山者の氣持も、ピークハンティングのやうな、山を征服し、或ひは山と闘ひ登ると云ふやうな、はげしい、動的な部分は次第に尠なく、且狭くなつてゐるつて

靜かな思想的に深味を持つた、即ち一言にして云へば、靜觀的な態度や心持を多分に有するやうな山の登り方が行はれるやうになつたのであります。少なくとも現在のアルプスの登山の状態は、私のわづかに知る處ではこうではないかと思はれるのであります。

この登山の進みゆく上に於て變化推移に於て、こゝではその外形的に表はれた登山法の變化の方面は少しく省きましてピークハンティングと云ふものから、靜觀的な山の登り方——私はこのピークハンティングなる語に對立する適當な言葉を現在知りませんが、今日のある登山家が使つてゐる語にこの靜觀的 Contemplative と言ふひとつの語を見出しましたので、それを假に、ピークハンティングなる語に對立せしめることとして置きたいと思ひます——に移つて行つた、その新らしい登山者の山を登る態度に就て、二三の登山家の書きましたものを觀てみたいと思ひます。

雪の後の青天

いと う 生

烈しい吹雪の後に來る、あのすばらしい快晴の朝の太陽は、いかに輝かしく我等の心にまで映りて見ゆるものぞ、森羅萬象凡て一切の存在は、こゝに新らしい生命に溢れ、力強く、我等の意識の世界にまで甦り來る。

されば我等の生活に於ても、爽快なるかのすばらしい快晴の朝をもち來らす爲に、烈しい吹雪の夜を必要とほしないか。

されど我等はこの吹雪の夜を、かの人工的なるルナパークに廢積的な酒場の零圍氣との中に見出し得なかつた、この我等の吹雪の夜の對稱は、遂に唯山岳それのみである。げにも我等は、この望まじき文明生活に於ての肉體的、精神的の羈絆の一切から離れて、原始的なる山岳へと進み入る。山岳がより高ければ高い程、より峻しければ峻しい程、我等のこの欲望は一層満足される。

かくて日に焼けた赤銅色の顔をもつて我等の住家たる都會に歸り來る時、そこに配列された事象の總ては、如何に我等にまで華かにも輝かしく見ゆることか、かくて我等は肉體にも精神にも倦怠を感ずることなく、大いなる緊張をもつて、再び我等の仕事は愉快に續けし行けることが出来るであらう。

ステムターンに就ての考察

特にカウルフイールドミツダルスキーの

テクニツクの比較とそのコンビネーション

中野誠一

一、ステムターンと杖の利用

全てのターンを練習する場合、乃至實地に應用する場合
(筆者の實地應用はスキーによる旅行即ちクロス・カン
トリー スキーイングを指すものである事を斷つて置く)

杖を利用してそのターンの効果を助長さす事は甚だ必要な
事であるが同時に杖の利用を誤つて行ふ事は甚だ無意であ
り且つ危険も多いものである。従つて、杖の利用を有効な
らしめる爲の練習は甚だ重要であり困難な事であつて、特
に此の問題は、ステムターンに於て甚だ重要である。

ステムターンに於ける杖の使用方法、使用範圍に就ては
既に十數年前歐洲に於てはリリエンフェルトスキー術の擡
頭と共に、其のテクニツクに縦屬して、スキー史上有名な

問題となつた事は知悉の事柄である。然し結局、ツダルス
キー氏のリリエンフェルトのテクニツクとウイットフェル
ト氏を中心としたノールウエーのテクニツクは互譲的の接
近を見て新しく兩者の混血兒的の一種テクニツクが生れ、
それが現今のスキー術を形成したと見て良い。

然し杖の使用方法和その範圍に就ては大體に於てノール
ウエー派の勝利と見る事が出来るのである。

筆者は本論に入る前に、杖の使用そのものを一通り説明
する事を許され度い。リリエンフェルトのテクニツクは杖
の使用が線的であり、ノールウエーのテクニツクは點的で
ある。少くとも我國では大體に於て前者は下降の場合に有
効であること見得られる。然し吾人が常にノールウエー式の

杖の携行を主張する點は前者が下降に有する利益より遙に巨大な利益を發行時に於て後者が有する爲である。元來單杖即ちリリエンフェルト式の杖は此れを兩手に握り、此れを線的に使用する事を原則とし、復杖は兩手に一本宛を握つて之を點的に使用するのを原則として居る。然し復杖を二本合せて兩手に握り、此れを單杖的に、換言すれば線的に使用する事は、無論單杖を使用する程便利では無いが、普通の場合には大した不便を感じない。此れが吾人の復杖を主張する理由の一つである。

處で歐洲のスキー界は、甚だしく單杖とその使用法、即ちリリエンフェルトの杖を嫌つて居る様子である。従つて復杖を二本合せる使用法、即ち復杖の單杖的使用法は斷然認められて居ない。英國スキー協會の階級制のテストには一本の杖を兩手に握る事の二本の杖を一束にする事を禁じて居るのを見ても明である。現に獨乙のスキー活動寫真 *Das Wunder des Schneeschuh's* を見ても如何なる場所でもかゝる杖の使用、即ち復杖の單杖的使用法は行つて居らない。然し乍ら、實地應用の場合には單杖的使用法は復杖的使用法よりも、往々にして優る事を認めて居るらしく、アーノルド・ランの如きも、杖を二本合せて兩手に握る事は長途の旅行の終り等には、轉倒を來す事が少く、従つて疲勞を助ける、と云つて居る。

歐洲のスキー界の現状は、前述の如く、單杖的使用法を嫌惡して居るが、其の原因の主なるものは、其の單杖的使用、線的を使用を必要とする地形、地表上の状態が無いと云ふ點に在ると考えられる。然し、我國の如き權木の密生して居る土地では、如何にしても單杖の使用法を要しはせないかと思はれる。即ち極度に迄腰と膝とを屈して障害物を通過し、その爲には比較的急な下降をも杖の制動力にすぐる必要が甚だ多い様である。又、ステムターンに於ては復杖は例へターンに於て合理的であるとしてもその實際的價值は單杖的使用の方が遙にそのターンの應用範圍が擴汎である事は否まれない。無論、美觀の點から云へば、單杖的のステムターン、即ちリリエンフェルトのステムターンはノールウエー式のステムターンに一步を譲るとしても、又現今歐洲スキー界の状態や主張が如何にあらうとも、我國のスキー術中には必ずリリエンフェルト式の杖の使用法即ち單杖的使用法、を保存し且つ應用せねばならないと信じらる。杖の事は、歐洲及び日本のスキーの事情に甚だ精通して居るウインクラー氏も、力説して居る。

概述した理由の下に筆者は敢て復杖の單杖的使用法を、一特にステムターンに於て一認めらるものである。従つて又、リリエンフェルトのテクニクをも認めるものである讀者の中で、『今更、リリエンフェルトのテクニク等は

野暮臭い』と考へる人のある事を恐れて、敢て、其の立脚を明にした次第である。

二、兩種のステム・ターン

以上に述べた通り、ノールウエーのテクニツクと、ツダルスキーのテクニツクとの二種のステムターンがある。そして又ノールウエーのテクニツクにしても之れを説く人毎に其の方法が異つて居る。それはやはり個々の人の練習方法が異り、解釋が異つた爲であつて、當然の結果と云ひ得られるが、何れが正しいステムターンであるかと云ふ事は決定し得られない。然し、其の中で最も吾々に良く教えて呉れるのは、先づカウルフィールドのテクニツクであらう。彼一流の分解的説明を以つて、要點を摘出するに明確である事は到底他の及び得ない事である。同時に、そのテクニツクに於ては彼獨得(尤も彼とアーノルド・ランシの共同的の仕事であるが)の點がある。特にリフトドステムターン等と、普通のステムターンを區別して二種の對峙したステムターンを主張せる等は、カウルフィールドとランシのみに見る點である。故に筆者は便宜上敢て此等の人のテクニツクをカウルフィールドのテクニツク (Caulfield's Technique) と云ふ事にする。而して此れから説く問題は、此のカウルフィールドのテクニツクとリリエンフェルデルテヒ

ニツク (Sillienfelder Technik) 即ちツダルスキーのテクニツクに就いて云はんとするのである。

扱て、今兩テクニツクの主要な差異を挙げれば次の二點に歸着すると思れる。

一、体重の左右移動 (Shifting of Weight)

二、杖の使用方法和利用の範圍

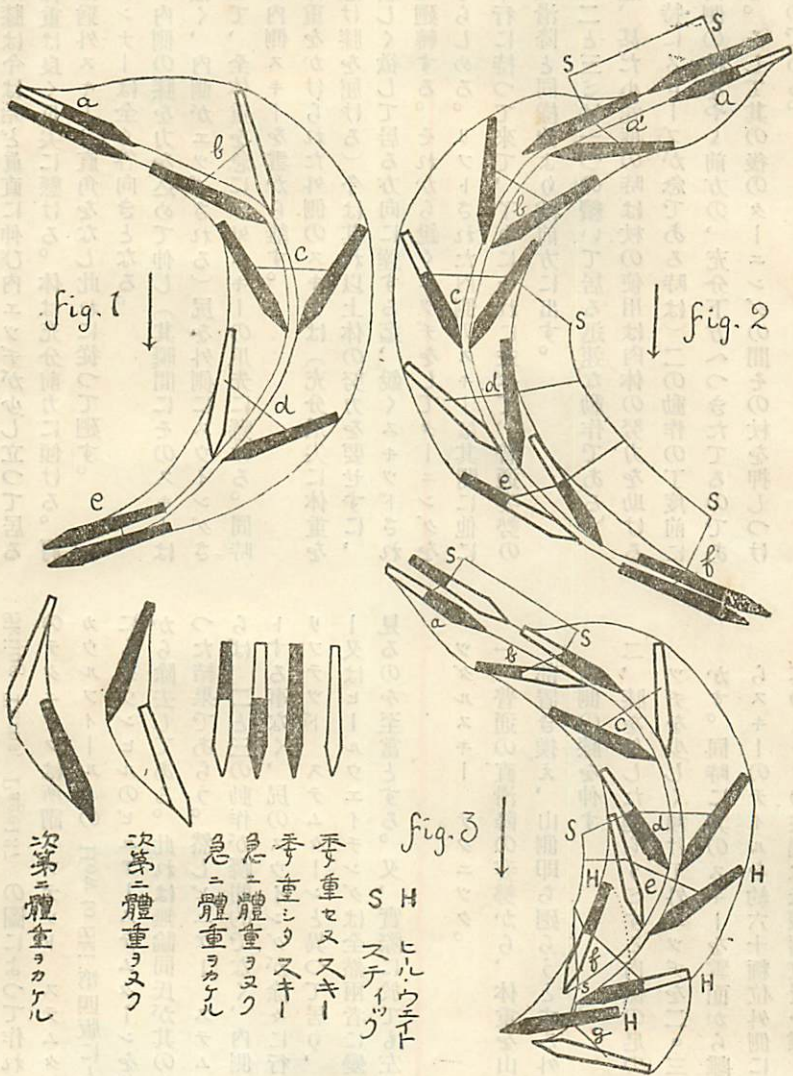
筆者は此等の點に就いて比較する前、一通り、テクニツクを記述した方が便宜であると思ふ。然し至ての場合の列擧は繁であるから、代表的の斜滑降よりのダウンヒルターンに就いてのみ記する。

カウルフィールド テクニツク

一、兩膝を屈け互に確り接する。廻らうとする外側(山側)のスキーを全く体重を懸けずに、廣くコンパージエントの形に開き、同時にそれをやゝ内側のエツヂングをする。

谷側の膝は多く屈つて居る。そして谷側のスキーは猶鋭くエツヂして居る。山側スキーは外前方にスキッドレ其の尖は他のスキーの尖と接近して同じ高さにする。体は内側即ち谷側に傾け屈ける。肩は外側のスキーと直角にする。スキーは廻轉を初める。

二、内側スキーのエツヂを少しく立て、兩スキーに平等



次第一體重ヲカケル
 次第二體重ヲ又ク
 急ニ體重ヲカケル
 急ニ體重ヲ又ク
 季重セヌスキ
 季重シクスキ
 急ニ體重ヲ又ク
 急ニ體重ヲカケル

fig. 3
 S H
 ステイツ
 ヒルウエイト

に体重をかけてスノーブラウ（全制動）の姿勢とする
兩膝は今ほ殆ど真直に伸び内エツヂが少し立つて居る
体重は良く爪先に懸ける。体は充分前力に傾ける。肩
は猶外スキーミ直角をなし此れに従つて廻す。
ランナーは全く谷向きとなる。

三、内側の膝を力を込めて伸し（其瞬間にそのスキーは
強く、内側がエツヂされる）尻を外側にスウイングさ
して、全体重を急に、外スキーの爪先に懸ける。同時
に内側スキーを雪から離す。

体重をかけられた外側のスキーは（充分爪先に体重を
懸け膝を屈ける）今は其れ以上体の努力を要せず、
新しく欲して居る方向に達する迄、鋭くスキッドされ
て廻轉する。それから鋭くエツヂをしてターニングを
了らしめる。リフトされた内側のスキーは其間に他に
平行に持つて来て、了りにそれに並べて、普通姿勢の
直滑降と同様他より稍前方に出す。

（二と三は一つの續いて居る迅速な動作である）

注意、甚だ小速度の時は杖の使用は肉体の努力を助ける
（特にスロープが急である時は）二の動作の丁度前に
内側の杖をやゝ前方の、充分下方へつきたるのであ
る。そして其の後のターニングの間その杖を押しつけ
るのである。

第一圖は此のステムターンを示して居る。(Canfield, V;
Skiing Turns, Page 137) の圖によつて作れるものなり) 此
のテクニクは所謂リフトッド ステムターンであるが、
カウルフィールドの How to Ski 第四版にも Skiing Turns
にもダウンヒルのビュアーステムターンを其のテクニク
から除去してある。此れは無論同氏が其の必要を認めな
かつた結果であらう。然しビュアー ステムターンとしてな
らば、二と三の動作が瞬間的でなく、内側のスキーをリフ
トする事なく、尻のスウイングが徐々に行ふ事だけが、
リフトッド ステムターンと異つて居り、シフトングとト
ー又はヒールウエイチングは全然兩者に變りの無いもの
を見るのを至當とする。又、實際に於ても左様である。

ツダルススキー テクニク。

一、普通の直滑降の姿勢から、体重を山側のスキーに全
部置き換え、山側即ち廻らうとする外側の膝を屈け、
内側の膝を伸す

二、膝を伸した廻らうとする内側の足の母指側即ち内エ
ツヂを少しく傾けて外エツヂを二・三ミリメートル浮
かす。同時に其のスキーを雪面から離さずに撫でなが
らスキーのテイルを約六十糎位外側に押し開く、然し
其のスキーの尖端は矢張舊位置を離さずに居る。又同

時に、杖を弱く且つ短く雪中に入れ、山側の拳は其の膝の中程に接着せしめる。握つて居る點から尖迄は下腿より長くは良くない。

三、以上のシテムシテツルングの姿勢から、上体を急に谷側に捻り、兩脚を伸して、兩脚均等に体重を委ね、兩スキーのテイルを出來得る極り互に開き、スキーはフテツトにする。全體は伸しす。然しあまり前方にかゝると、うつづぶしに倒れる事がある。此動作の鋭さを缺く時は、練習を甚だ困難なものにする。杖は水平を保つて、自由にする。

四、以上の全制動の姿勢から、猶も絶えず体を内側に捻りながら、杖の尖を内側にもち代え拳を其の側の下腿に接着せしめ、膝を屈けて全体重を内側の脚に置く。エツヂは猶もフラットにして、テイルは依然離して居る。シテムスキー即ち外側のスキーは此の運動中後に残り其の結果、尖端はやゝ、内側スキーの後に位置し

二の動作と同様であるが、方向の變つたシテムシテツルングになる。

五、杖をシテムシテツルングと同様に軽く雪中に引き、谷脚をまけて体重を此れに置き換える。此時杖は不意におこる体のかたむきを矯正する目的である。そして山スキーを谷スキーに平行に並べる。(第二一回)

カウルフィールドは『ダウンヒルターンが、直滑降のアツプヒルターンに用ひ斜滑降よりのアツプヒルには都合が悪い』して居るが、ツダルススキーは如何なる方向にも此れを採用して居る。

雪に就ては、カウルフィールドは『硬雪の場合に限る』とし、ツダルススキーは如何なる雪にも應用しやうとして居るものである。

又、斜面に就て、前者は緩斜面、小速度の時とし、リフトッドステムターンは稍々急な斜面に用ひる事が出来るとして居るが、後者は雪が良好なら六十度の斜面で出来るに説いて居る。

三、体重の左右移動 (Shifting of weight)

扱、兩種のステムターンの最も顯著な相違は何であるか云へば、第一に体重の左右移動であらねばならない。

第一圖、第二圖に就て、黒いスキーは体重を委ねたものを示して居るのであるが、此の圖に就て見ても明な通り、aからb迄の各部分に於てaとc及びbは同様のシフチングであるが、b、d、eは互に相異を見出すのである。第二圖のaは此の後の動作の爲速度を弱めんが爲にやる豫備動作であつて、此場は外スキー即ち山スキーに体重が委ねられてある。

然し廻轉運動を起す第一歩たる外側のスキーのテイルを押し開く事に於て既に兩者の間に多少の相異を發見する。カウルフィールドは外スキーのテイルを開く目的の爲に外スキーより体重を抜き去る事を教へ、ツダルスキーは平均にする様に説いて居る。然し此れは實際上にはあまり大差の無い事であつて、前者は其のV型にスキーを並べる爲には平行の位置から初めねばならないが、後者では既に、a'に於て、其半分を完了して居るが爲、全然体重を外スキーより抜き去る必要を認めないものであるらしい。前者はその後次第に外スキーに体重を増して行つて、cの位置でそれを平均にさせる。然し後者はbで既に平均に懸け、迄來るのである。

然し此のbよりcに至る間の兩者のシフチングの方法は何れが、廻轉を圓滑にし、或は何れが合理的の方法であるかを考へる事が必要である。外スキーのテイルを開くと云ふ目的の爲には、又従つて不規則の抵抗を少くすると云ふ爲にはカウルフィールドの方法が良い。何となれば、テイルを押開く爲にはその足に体重の懸らない方が自由に行はれ得る。然し、其のターンの傾向を強大にするにはツダルスキーの方がより合理的である。此れは、若し人間の脚が絶對に一定の角度で固着せない限り、内側スキーは其の抵抗をインサイドエッジに受けて、兩スキーの舵作用を助長す

るより、むしろ獨り舊位置にとり残される傾向の方が大であるからである。此の爲には内スキーの委重を可及的小にするを得策とするが故にツダルスキーの方法が稍々有利である。

此のaよりc迄の動作は多少其處に長短はあるが大した差は無いと見られるが、最も注意すべき點は、cよりeに到る廻轉範圍に於けるシフチングである。

cに於ける全制動の姿勢から、カウルフィールドにあつては次第に外スキーに多くシフトする様に説いて居るが、ツダルスキーは丁度反對に、内側のスキーに急に全体重を移し變える様に主張して居る。

今、全制動のV字形の滑降中何れが一方へ廻轉しやうとする場合、他の條件が全然同一であつたら、無論廻らうとする外側のスキーに体重を委ねばならない。右に廻らうとしても右スキーに体重を委ねてそのまゝ放任して置けば反對に左側に廻轉を初める。此れは兩スキーの受ける抵抗の差と方向とで當然起る可き現象である。此より見る時はカウルフィールドのテクニクは遙に合理的である事を知るのである。此の場合最もターンを圓滑に運ばすには、其の廻轉を妨げるが助長さす事の無い内側スキーの受ける抵抗を最小にするのが最も合理的である。故に此の點から見ればカウルフィールドのリフトッド・ステムターンは最も良

い方法と云はねはならない。然しこれに反して此の點ではツダルスキーのテクニツクは最も不合理な方法であると見る可きである。ツダルスキーの教える處では、此の缺點を壓える爲に内脚の膝を屈けると同時に内側へのボディスウイングを要求して居る。同時に杖の制動力をも利用し様として居る。尤も彼自身左程杖の力をたのんで居らないが彼の後進のリリエンフェルダは實際上杖を可成使つて居る。又、吾人の経験では、此の際杖の利用なしには、餘程の淺乾雪が硬雪でなければ殆ど不可能事であると思ふ。

然し、如何にボディスウイングをするとも、到底、外スキーに委重した時の様な圓滑なターンは不能であると思はれる。要するに此の場合最も重大な役をするものは杖である。杖の線的使用によつて、杖の受ける抵抗によつてターンを強請するものであると見られる。

四、杖の使用法と利用範圍

前述した通り、其の廻轉動作中に甚しく無理な點があるにもかゝらず、ツダルスキーのテクニツクは實地應用の範圍が遙にカウルフィールドのテクニツクよりも廣いこと云ふ事は全く杖の使用法にあると斷言し得る。

杖を廻轉の内側の雪面に押しつけて曳いて廻轉を助長させると云ふ事と杖に体重を託して廻ると云ふ事とは別な事

柄である。杖はこれを利用す可きものでこれにたよる可きものではない。全制動の時杖を内側にもち變えるや否や、直に雪を体の眞横の部分で、その杖で押さえる様にす可きである。

然し如何に杖を利用して前述べた通、体重の委託に大きな誤りがある以上、リリエンフェルトのテクニツクは甚だ不利である。そこで最も我國の地形に適したテクニツクを得る必要があると思ふ。

五、兩テクニツクのコンビネーション

以上述べた通、カウルフィールドのテクニツクは遙にツダルスキーのテクニツクより合理的（特にシフチングに於て）であるが、杖の使用を必要とする我國の如き地形では、その線的使用をカウルフィールドのテクニツクに應用して一種のコンビネーションを作る必要があると思はれる。それ等の點より、筆者の考へを發せしめ、又我國の多くのランナーの實際行つて居る方法を分解的に考察するなら、次の様な兩テクニツクのコンビネーションを最も適當とすると思ふ。特に此の場合には前二種の如き、爪先委重（Toe weight Hinge）のみで終始する事なく踵委重（Heel weighing）を應用する事がその重要な部分である。（第三圖参照）

一、斜滑降より谷スキーの半制動に移る。体重は山足即ち廻らうとする外側の脚のトゥエイチングである。これはツダルスキーのテクニツクの第一の動作と全然同一である（第三圖 a—b）但し、此の動作は只斜滑降の場合速度の大な時にこれを制する目的であつて、速度の小な時に必要である。

二、体重を廻轉の内側のスキーのトゥエイチングとして外側のスキーのテイルを開く、兩スキーは出來得る限りフラットに保つ可きである。此れはカウルフィールドの第一の動作と同一である。（第三圖 b—c）

三、体を内側即ち谷側に捻りながら体重を次第に外側のスキーにシフトして行く、猶此の場合もトゥエイチングである。そして完全に谷向きなつた時左右のスキーに均等に体重を配る。そして此の間に杖を外側より内側に持ち變える。大体に於て、カウルフィールドのテクニツクである。（第三圖 c—b）

四、bの位置になつた時、杖を内側の雪面の比較的体に近い場所に入れて曳く、然し体重はbで全部外スキーにシフトする。そして杖を廻轉の補助に用ひるが決して杖にたよつて内側のスキーにシフトしては良くない。此の場合初めてやゝヒールウェイチングを行ふのである。ヒールウェイチングによつて横滑りを大きくす

るのである。（第三圖 d—e—b）

五、内側のスキーが水の流れる方向よりも猶内側を向いた時、即ち始め谷側であつたエツヂが山側となつた時（第三圖 eの位置）突然内側の膝を折り体重を内側スキーにシフトしてそのスキーの外エツヂ即ち山側のエツヂをして充分に立て、完全なヒールウェイチングを行ふ。同時に多少急に尻を外側に捻る事は有功である。其の結果は杖は今迄体の真横であつたものが稍体の内後側に残されつゝ曳かれる。多少杖にすぎた氣味になるのは許される可きであるが、全然杖をたよりにする事は良くない。廻轉は可成り大きな横滑り^{サイドスリップ}を起しながら、急に始まる。（第三圖 e—g）此れはツダルスキーとそのシフトの点だけが一致して居る。

以上に於て大体其の動作を示したのであるが、問題はfの位置で体重を内側スキーにシフトする事と同時にヒールウェイチングを行ふ事である。

内側スキーに体重を委ねる重なる目的は、永く外側スキーに委重して居れば益々そのスキーの受ける抵抗が大きくなつて谷側へ轉倒する危険が増して来るが故に、内側スキーがエツチングとボディスウイニング及びヒールウェイチングによる廻轉に最も便利な位置に達した時、即ち今迄は以上

三種に起因する廻轉に不便であつた位置が、外側即ち山側のエツチが用ひられる便利な位置に達した時、思ひ切つて内側スキーに体重をシフトするのである。又、内側にシフトして求心力を増し又杖による内側の抵抗を増大せしめるのである。

次にヒールウエイチングにする目的は只スキー後部のサイドスリッピングを増大させて廻轉を急速に且つ小にするのが目的である。たゞヒールウエイチングにすると、内側のスキーであるが故に或る程度迄テイルが廻ればそれ以上には外スキーのスキッドに妨げられて、廻轉しすぎる事がない。然し甚だ急な斜面で横滑りの多い場所では、そのヒールウエイチングを徐々にやつて行く方が安全である。

六、總括

以上述べた處を總括的に考察して見れば、最も簡単なシステムターンはカウルフィールドのテクニクである。故に比較的廻轉の容易な状態の下では此のテクニクが最も有効至便である。

然し實地に應用する場合、他のテレマーク、クリステアニア等の用ひられない状態にあつて、最も有効なターンはツダルスキーとカウルフィールドのコンビネーションである。その特長とすべきは左の點に在る。

- 一、急斜面に於ても、容易に行ひ得る。
- 二、雪の状態が極端に悪くなければ、クリステアニアやテレマークの用ひ得られない場合にも有能である。
- 三、杖の利用によつて廻轉を助ける事と山側に委重する事の爲に轉倒を來す事が少く従つて疲勞と時間の徒費も少くする。

四、スキーの運動々作上、ツダルススキーのテリニツクの如き不合理な點がなく、従つてターンを強調する肉体的努力を少くし、同時にターンを圓滑ならしめる。

附言

大体に於て筆者の云はふとする處は述べた心計である。然し猶一言附加する事を許され度い。それは如何にツダルススキー氏のテクニクがブリミチブであるとしても、如何に不合理な點があるとしても、吾々の絶對に見逃せないのは其のテクニク中に存在する精神である。ツダルススキー氏のテクニクの主眼は確實性(positivity)にあるのである。スキー術、特にスキーによる登山に於ては、其のスキーのテクニクに就ては兎に角、其の精神上のテクニクに於ては永久に存在する大きな指針である事を忘れてはならない。過日、同人Kと語つた時、筆者は、リリエンフェルト万能のスキーより入つてノールウエイ万能のスキーに變移し更に今日は兩者の中間に在る、と云つたが、Kはツダルススキーのスキー自身よりその精神を尊ばねばならないと云つた。筆者もその事は飽く迄同感する。

敢て末文にその事を記して、ツダルススキーに感謝したいと思ふ。

山地に於けるスキーの實際

加 納 一 郎

スキーの技術を総合的に記載するものは單にその各種の技術に就ての標準の型式及び方法を述べるにとどまる。またスキー場に於けるスキーイングは自らの技術を此の標準にまで持ち來し、又は之を超えてより高尚なるものを獲んとする點にその目的を置く。

山地に於けるスキーは實際に此等の標準の型式又は方法通り之を行ふに云ふことは甚だ困難なことであり、また必ずしも嚴密に教程の通り行ふ要も認めないのである。何ぜんらば、スキー場に於けるスキーイングは技術それ自身の爲に行はるるものであつて、その技術の望み通りの達成によつて愉快と満足とを得るものであるが、山地に於ては、勿論より大なる滑降の慾望の爲にはあるが、その動作の目的は直接各個の技術それ自身の達成にあるよりも、その技術を以て何等かの目的を達せんとするにある。即ち山地

スキーの動作はその目的を動作の外に持つものであるに反して、スキー場に於ては動作の目的は動作の内にあると云ふことになる。従つて山地のスキーは必ずしも教程通りに行はれない。それよりも動作の外にある目的を達せんが爲に必要な條件に適合すべく各種の考案が行はれる。速力の調節や、雪質や、連絡や其他様々の要求に應ずる爲には、常に一定の標準型式を以てしては間に合はない。

スキーの技術の發達はスキー場に於ける余裕ある考察と練習との結果生み出さるるものもあるが、かゝる山地に於ける滑走に於てもその新しい技術が生み出さるるものである。否むしろ、私の考へる所では、山地の實際に於てその萌芽を見たところの新しいスキーの技術が、スキー場に於て反覆研究された後に初めて一つの新しい技術として完成され、堆稱せらるるに云ふ過程をとるのではあるまいか。

かのジャムブラウンドの著しい發達や、エル・エス・テイの技術は恐らくはかゝる経路を取つたものではないかと思ふのである。

山地に於けるスキーはかくの如く多少とも標準型式から離れてくる。従つて人によつて差異を生じてくる。即ちそこに個性があらはれる様になる。それ故山地に於けるスキーイングに就て説く場合には各人必ずしもその説を一にしない。こゝにたゞ自分の考へるところを述べて、廣く諸兄の是正を俟つ次第である。

登行に於ける方向變換に就て

谷向方向變換と山向方向變換を比較し、山向方向變換を用ひ得る限界に就て説こうとするのである。此の二種の技術の説明は略する。

今吾々が此の二つの同じ目的の方法を考へるに、谷向は消極的であり、山向は積極的であること云ふことが出来る。なぜならば、谷向は一步を損するに反し、山向は進行の上から見て一步をも空しくしない。之を他面より云へば谷向は多少ともその位置を低下するに非ざれば行はれ得ないに反し山向は、新しき方向の山足を更に一步高く踏みつけることにより、方向の變換と同時に高さをも高めることが出来るのである。而しながら此の比較は既に先進者によつて

固くスプールが印せられた所に於てはその意味が弱められる。而しかゝる場合に於ても、谷向を用ふるときは多くは變換後スキーが以前のスプールに置かれ勝ちなのに反し、山向を用ふれば、スキーは新しい方向のスプールに置かれ易い。

此の二方法を行ふの難易に就ては大いに考へなければならぬ。それは恐らく、傾斜の程度と雪の状態とに支配されるのであろふと思ふが、一般に誰人も傾斜の緩い所では深く考へるまでもなく山向を採用してゐる。それは傾斜が緩い爲に足を上げる事が少いから従つて動作が安定に容易に行ひ得るのみならず、かゝる場合には舊方向と新方向とのなす角が大きく、山側に廻る方が谷側へまわるよりも得策であることが明かに認識し得るからである。而し傾斜が急になつて来るか、左程急でなくても積雪の深度が大なるかの状態が横滑りを生じ易くなつて来るに多くは山向を試みなくなる様である。此は回轉角の得失が輕めらるると共に、安定度を重く見る所から來て居る様である。而しながら、いづれが安定であるかと云ふことは議論のある所であるが、谷向に於て最も不安定な瞬間は全く谷向になり兩脚が相反する方向にある時であり、山向に於ては、山脚を新方向に向ける間にある。そして此の兩者を比較するとき、假にその最も危険な瞬間に於て横滑りが生じたとする

ば、此の不幸からのがれる爲には山向の際の方が有利である。實際谷向キックターンの失敗は山向のそれよりも回復に多くの努力を要するこゝは吾々のしばしば見る所である。安定度の比較は如上を以て充分は云へないかも知れない。實際谷向の危険な瞬間はたゞ全く兩脚が反對の方向にある場合のみであるか、山向に於ては先に云つた如く、山脚を新方向に向ける場合のみならず、谷足を新方向に向ける場合に於ても、又同じ位の不安定を來すことがある。而しながら、谷向に於ては尙此の外に、特に急斜面では谷を見るから恐れを生ぜしめると共に、障害物の多い森林中では、スキーの先端が灌木等に支へられて回轉に思はぬ失敗を招く等、たとひ注意と熟練によつて避け得らるるとは云へ、見逃し難き欠點である。更に之に動作に要する時間を考慮するならば、山向が遙かに優れるものであることを首肯するであらふ。さてそれでは山向がはたしていづれの限界にまで用ひ得るか云ふ問題である。谷向はいかに深雪の急斜面でも容易に行ひ得るものゝ如く考へられてゐるが決して相ではない。私の考へるところでは、山向が多大の困難を感じる様な所では、谷向も亦さう容易には行はれ難いのである。深雪で傾斜が二十度以上になれば山向は確かに困難である。而しその困難は打ち勝ち難いものではなく、練習によつて達し得られると思ふ。嚴密に此の兩者を

比較するならば、谷向の方がより深いより急な斜面で行ひ得よう。而し此は處女雪面での事である。既にいづれの方法によつてもスプールで出來てゐる所では山向がより有利である。

山向方向變換は、極く初心者によつて意外な所に試みられ、その多くが失敗に苦しむのを見る。此はまだスキーの實際を知らぬもので、單に一見樂で速い様であるから、眞似るにすぎない。而しほんとうにスキーを習つた人が、いつまでも舊いアルバイン式の固陋な方法に拘泥する必要がある。今日に於ては山向方向變換を主張するものはビルゲリー氏ばかりではないのである。

如何なる杖を用ふべきか。

山地スキーに於て杖に關する各種の問題は、興味ある且つ重要な事柄であり、またしばしば論議せられたところである。

如何なる杖を採用すべきかに就て今日迄唱へられた説は次の様に分類することが出来る。

- 一、單杖を可とするもの
- 二、複杖を可とするもの
- 三、複杖の一本を用ふべしとするもの
- 四、折中式を用ふるもの

折中式とは單杖にリングを附し、又は更に他端に複杖の様な紐を着けたるもの。

而しながら今日の事實を見るものは此等の諸説のうち、いづれが勝を制したか明かなことである。アルバイン式スキー術が日に日にその姿を消しつゝある現在に於ては、單杖と複杖との比較は過去の問題となつた。従つて複杖に垂涎しつゝ尙單杖を棄て得なかつた折中説や、複杖の價値を認識しつゝ完全に之を用ひ得なかつた複杖一本説はたちまち影を絶つた。

今日に於ては更に進んでピツケルと複杖との併用を如何にすべきやに就て考へられてゐる。即ち

一、複杖を用ひピツケルを背に負ふもの

二、複杖の一本とピツケルとを用ふるもの

三、複杖とピツケルを兼ねる所の杖を用ふるもの

此の三つに分類することが出来る。而しながら此の問題はピツケルを必要とする高き山岳を登る場合に於て起るものであるが故に、此處では此の興味ある事柄に就ては述べない。たゞ普通の山地スキーでは、複杖を用ふることが、最も有利で適當なものであることは今日では問題ではないのである。否、尙一部には疑問とせらるる人があるかも知れないが、後に複杖の使用に就て卑見を述べよふと思ふから、此によつて私の斷定説を了解して頂き度いのである。

さて如何なる杖を用ふべきかと云ふことは、此處に於て如何なる複杖を用ふべきかと云ふことになる。吾々は他の如何なるスキー地方よりも竹に恵まれてゐる（北海道や樺太にはいゝ竹はないが）此の軽くて強い材は他の色々の樹種よりも優つてスキー杖に適當してゐることは明かである。こは云へ吾々の市場に供給せらるる竹製複杖が全て善なるものこは云ひ難ひ。竹製のストックに籐製のリングを附したものが最上のスキー杖ではあるが吾々はしばしばそのリングが壞れ、竹が悲惨にも折れたのを見てゐる。善いものではない。要は個々の嚴密な撰擇を重視しなければならぬのである。節のそろつた、節間の短かいもので、且つあまり太すぎではならない。リングに就ては枚舉にたえない程種類があり、年々新しい考案を見る。而し此と云つて頭抜けたものはない様である。たゞ上端に附せられる紐に就ては、あまりに長くする必要もなく、革よりも柔軟な麻製の紐の方がよい。そして之は杖を手にしつかり結びつける目的にばかりあるのではないことを理解してゐなければならぬ。

吾々が竹杖の優良なものを比較的安價に得らるる事の爲に木製の杖に對して一顧をも與へない云ふのは考へものである。私は木の杖に就て此處に一言し様と思ふ。此の種

のうちに材部に加工してあるもの、細き幹の通直なものをたゞ樹皮をはいだゞけで用ふるもの二つある。前者は時に半圓形に作られ二本合せて用ふるのに便利なる様作られたものがある。かゝるものは今日に於てあまり堆稱すべきではない。後者に屬する所の杖は、その資材が優良であるならば、決して竹杖に劣るものではないと考へられる。木ミ竹との杖の比較に於て第一に稱へられることは重さの差である。而し通直なる樹幹そのまゝのものはその比重はさ程大ではない。勿論此はその樹種と、樹齡其他枝條なるか、細き幹材なるかによつて異なるものである。またその強靱さに於ても、全く比較にならぬものでもない。

滑降に於ける杖の使用に就て

杖を如何に使ふべきかといふことに就てはしばしば説かれたところであり、初心者が練習の初めに當つて必ず豫め注意せらるるものである。

實際杖はその使ひ方によつて非常な助力を得るものであると同時にその悪用によつて救ふべからざる陋習を生ずるものである。が全く誤つた杖の用ひ方に就ては今更述べる必要はなからふ。私はこゝで山地スキーの滑降に際して杖が將してどれ程の役目をなすべきか云ふことに就て述べて見たいと思ふ。

私は山地に於けるスキーの技術も出来るだけノルウェー式の技術を尊ぶべきであると考へてゐるものであり、従つて普通の状態にあつては、生地に於てもなるべくスウィングを多く用ふる方がよいと思つてゐるのである。故に此處に杖の使用に就て云はんとするのは結局、その使用方を出来るだけ軽減するの良策たることを主張せんとするのである。讀者は或はかく云へばそれは技術の巧妙の問題である。考へられるかも知れないが、私はスキー練習場に於ては即ち熟地に於ては極めて鮮麗且つ確實なスウィングをする所の人々の多くが、一度生地の滑走になるに、全くかゝる技術を知らざる人の如く、如何にスラロームの好適地であるが、ステムボーゲン^{Stemboegen}を以て之に代えて却つて苦しんでゐるに云ふ様な事をしばしば見掛ける。それ故、此處に云ふ所はまた山地にあつては尙アルパイン式スキーでなければならぬと云ふ考に對して覺醒を促さんとする事になるのである。

一般に杖を使用すると云ふことは滑降時にあつてはその速力を制限せんとするに在ることが多い。(速力の制限は廣義に於て停止をも含む) 即ち言葉^{言葉}を換えて云へば或る力又は重さをサスペンドするにある。さうして此の事は云ふまでもなく新たな力を要することであり、従つて疲勞を増すものである。同じ山を登つても初心者がより大なる

疲勞を覺えるのは、轉倒の曲數の多いのと、精神上の原因もあるが、一面には杖にあまりに多くを期待しすぎる爲に在ることも否定することは出来ないのである。私が杖の使用を出来るだけ少くすることを主張するのは、無理にスウィングを用ひてその技術を銜ふことを云ふのではなく、此の疲勞をなるべく軽減せんとの意が第一なのである。だから無闇にスウィングをやつても轉んでばかりゐる様では、如何に杖を使はなかつたと云つても何にもならない。やれば出来る所でも尙杖を働かせてゐる習慣から漸次に脱却することを心掛ける様にすればよいのである。

此等について云ふべき事が多いから更に項を改めることにする。

杖を用ひざる半制動滑降

ズダルスキーの考案した半制動滑降に代るべき最適のノルウエー式スキー術はクリスチャニア制動であるが、前者によつて滑降の大部分を行ふてゐた人が、急にクリスチャニア制動のみによることは困難であり、また實際場合によつてはクリスチャニア制動の様に体の重心が高くては危険な場合がある。此う云ふ場合、杖なしにやる半制動が疲勞と不安定から救ふて呉れるものである。杖を用はぬ半制動とは如何なるものであろうか。

吾々は半制動を教へられるときに、此を標準型式に行ふことは初めは非常に無理な様に感ぜられるのであるが、脚や上体の姿勢をやかましく云はれると共に、必ず杖のつき方について二三の小言を頂戴するものである。その杖のつき方の要領をつかむのはなかなか困難である。半制動に於て此の杖は將して如何なる役目をなすのであるか。簡単に云へば杖は速力制限作用の一部をなすもので体重の一部を分擔するものではないと云ふことになる。既にして杖は速力制限の爲にのみ用ひられ、而も杖のみが速力制限の役目をなすものでないならば、杖がその作用を引受けなくとも或る程度まで制動はなし得らるのであつて、且たさび杖がその作用を止めたからと云つて、速力制限以外の點に於て不都合はない筈である。(尤もその保ち方の如何によつては異議があるかも知れないが、たゞ同じ位置にあつて、その作用だけを止めるとすれば) 此處に於て杖を用ひざる半制動が理論上可能なことが解る。之を實際に行つて見るに制動が谷足スキーのみで行はれなければならなくなつてくるので、その爲には谷脚の力だけでは充分その目的を達することが困難となり、勢ひ体重を之に多少かけてその不足を補ふ様になつて来る。従つて山脚の膝を屈することに少くなくなつて、体の重心は稍高くなる。

此の方法は決して完全な姿勢ではなく、緩急な斜面と速

力の場合には可能であるが、さうでない場合にあまりに長くつゞけることは困難である。また先進者の爲に雪面が非常に亂されてゐる場合にも困難を感じるものである。

而しながら此の方法はたゞ急であつても緩い速力で降りなければならぬとき、例へば多くの障害物があつたり先が混雑してゐて、普通の半制動で一滑りに降りて行かない場合に適當である。又此の方法になれる事の利點は次に書くところのステムボーゲンの實際を考へるに更にその深さを増すであらふと思ふのである。

ステムボーゲンの實際

ステムボーゲンは恐らくリ、エンフエルデル式スキーの最高の技術であらふ。或る者は之をアルバイニカーズと呼んでゐる。斜滑降の細いスプールと回轉の際の廣いスプールの交互した一連のステムボーゲンスプールは、それがレギュラーに盡かれてゐると誠に美しいものであり、またたとひそれが大いなる苦勞を要するものであることは云へ、右に左に此の回轉を繰返して降つて行く事は、スラロームで一見やすやすと行くのに比して、壯重で、何となく樂み深いものである。こゝは争はれない。

吾々はしばしば此のステムボーゲンの愉快さを、味はふと共に一面にをいてその苦い失敗の想出や、たえがたい程

のあの努力の記憶を持つてゐるのである。私は前にも云つた様に此の無闇に力を要する技術なるべくさせて、スラロームを採用する様に心掛けるのがいゝと思ふのであるがあながち全く之を排斥するのではない。事實私は尙此の技術でなければならぬ、尠くとも此の方法を用ふるのが最も適當であるを考へられる多くの場合のあることを知つてゐる。それ故此處にステムボーゲンの實際的技術に就て書こうと思ふのである。

複杖を用ひながらステムボーゲンをやるふにすべきに第一に問題となるのは此の杖の處理である。元來が單杖を用ひてやる技術であるから、複杖を用ひて之をやるのには多少の無理が生ずることは當然である。此に就ては全ての人が各色々に工夫を凝らしてゐる様である。試に之を擧げれば。

一、複杖を二本合せてしまふもの。その合せ方にも色々ある様である。一本を他のリングの中に通して、上端は紐で結び合せるもの、またあらかじめさうするのに都合のいい様に半圓形に作つた木製杖を用ふるもの、またたゞ二本合せて用ふるものなどである。が要するに此の方法は甚だ握りづらいものである。

二、不用の一本は紐にて持ち引づるもの。合せて持つ握り方の不都合を避ける爲に不用の杖を引づつて行くことを

考へたのであるが此は、動作の變換の際に邪魔になり、特に停止する場合此の杖が精力で前に來て、胸をつき危険のをそれがある。

三、ステムボーゲンや半制動やストップ等の際を考へるに複杖は甚だ不便であるに云ふので、初めから複杖一本しか持たぬものがある。此は上述の不都合を避ける爲には、最上の方法であるがあまりに退嬰的である。

總じて此等の考案はステムボーゲンに於て杖をあまりに重要視するものである。が將して實際さうであらうか。私の考へは左程杖の力を重用しないと云ふ點に出發して、ステムボーゲンに於ても複杖を合せて一本にしたり、或は他の一本をぶらさけたりする要はなく、普通滑降時と同様に一本づゝ持つてゐる此の動作をやればいと云ふのである。

元來ステムボーゲンは右山及び左山の半制動と之を連結する全制動から成り立つてゐるものである。そして全制動と云ふものには杖は全く不要なのであり、半制動については前に述べた様に、私の考へる處では杖なしに之を行ふことも出来るのである。而しながら實際半制動と全制動の連繫である所のステムボーゲンをやる場合には、先に云つた様に全く杖なしの半制動では難かしい。そこで極く軽く杖を用ふる事を考へる。此は全く杖を使はぬ半制動に比

して、少しばかり杖を使ふことは甚だ大きい安定を與へるものである。その使ふ程度が問題となるのであるが、私の思ふのでは、その際山手の杖は普通の半制動に於ける如く左山の場合であれば左手でその中央部を握り、右手でその上端を握る様にする。しかし右手には他の一本の不用の杖（谷側の杖）を持つてゐるのであるから、握り難い。之は四本の指で谷側の杖を持ち、母指を山側の杖の上端にかけ之を母指と谷側の杖との間にもつて來て保つのである。か様にして持てば甚だ力がいり難いに云はれるであらうが山側の杖の上端は、杖が制動作用をなすとき前方へ動くから、之を止める様にすればいいので、今云つた様な持方をすれば、此の杖の動く力は交叉してゐる谷側の杖の先端にかゝるのであるから谷側の杖を四本の指でしっかりと保てばいいのである。たゞ此の際谷側の杖は力を受けて下端が後方に行き、山側の杖の先端は谷側の杖の先端からはずれてしまふ傾向となる。之を防ぐ爲に山側の杖にかけた母指に力を入れてしっかりと握るのである。（谷側の杖は全く雪面についてゐない。）杖の持ち方はこの様にするだけで充分である。即ち之の持方によつて出し得る力だけを用ひて杖の制動をすればいい。それ以上強い力をかけて杖の制動の役目をさせなくてもよい。尙私が此の持方を主張する他の著しい點は杖を持ちかへるのに甚だ手間がいらす、左か

ら右、右から左へと、いつでも方向を變ずるごこに、たやすく、相應じて行くことが出来る。即ち全制動の間は杖は兩方とも不用状態にある。その間に新しい方向への制動の役目に直ちに着くこゝが出来、杖は滑降方向の如何にかゝはらず常に同じ側にあつて、他の方法の様に右側の杖が左へ行つたり、左側の杖が右側へ行つたりする様な事がない甚だ手輕であり、滑らかに他の動作に移り得られるのである。二本合せ持つ方法だミ、ステムボーゲンと直滑降との斷續する場合なき、しばしば醜い杖の持ち變えをやらなければならぬ。

以上の方法によつて杖にあまりにたよりすぎる事から來るエネルギーの過度の消費と不愉快とから免れることが出来る。吾々は二本の杖を合せて持つたり、一本を引づる様なぎこちなさを山で見ないやうにしたいものである。

新しい杖の使ひ方

滑降時の杖の使用に就て、ノルウエー式スキー術は、リエンフェル式スキー術に比して遙かに尠い。いづれにしてもその杖の使ひ方は登行の際は別として、常に雪面に對してタンゼンシアルに用ひられた。然るに近時之と全く異つたラディアルな使ひ方をする技術が行はれる様になつた。それは即ちエル・エス・テイミカジャムブラウントミカ云ふ

ものである。

ジャムブラウンドはカウルレ井ノルド氏の How to Ski の初版にも出てゐるもので全く新しい技術ではないが、戰後クラリユーナ氏が杖を使つてあざやかにやる様になつてから一般に採用されるに到り、我國では獨乙から例の立派なスキーのフィルムが來て以來、その刺戟を受けて多くの人々がやる様になつた。エル・エス・テイミカはアーノルド・ラシ氏が一九二一年の英國スキー年報に發表したものであるが、此の技術も實際吾々は今迄やつてゐたものであつて、氏はたゞ理論的に完成したのである。その杖の使ひ方に就ては全く新しい方法で、前のジャムブラウンドと共に滑降技術上一の革命であるを見てもいい。そして此の種の杖の使ひ方の生じた主なる原因は、短時間に動作を輕快に行ふと云ふ點にあるを考へられる。いづれもスキー練習場で胚胎したものではなく、山地に於ける實際上の要求から生れ出たのである。

杖をかく、ラジアルに使ふごこは、之に体重をかける事になる。もつミ正確には物理学で云ふミ、の力の全部或は一部が杖に直接かゝる事となり、同時に回轉の中心となる。從來の杖の使ひ方では多く速力の制限とか、安定の保助としてむしろ消極的であつたのが、動作を速進し又は廻轉の中心ミなつて動作を輕快ならしめる作用を受持

つ様になつた。

杖の使ひ方はスキーを行ふ實際上甚だ重要なことである
各動作についてよくその使用される目的と効果とを考へて
たゞ盲目的に使用せず、より多くの考慮を費すならば、更

にその技術を高め得らるるものである。杖はスキーをやる
上に於て必ずしもなくてはならぬものではないが、決して
軽視すべきものではない。スキ技術の進歩の半ばは、杖に
かゝるものであると云ふも過言ではなからう。

生 命

— ヨゼフ・ユリアン・シエツツの譯詩 —

深い谷の中で、私は永遠の生命が、いかにも秘やかに呼吸づいてゐるのを聴きました。
私の心はそれを凝視（みつ）めました。そして立ち聞きました。私は耳を傾けて聴きました……………

表 夫

蒼白い氷河のうへで、私は永遠の生命が黙（もく）せる憂愁（うれ）を領してゐるのを感じました。
私の感覺は悲哀に擾（さわ）されました。そして私は悲しみに深く沈（し）みました……………

高い山の頂に立つて、私は永遠の生命の偉大さをうち眺めました。憂鬱は消去（しょうそ）りました。
日に輝く雲霧のうへを私の心は飛びました。喜びが私のなかに充ちました……………

蘆 別 岳

岩 森 秀 夫

時 日 二四・四・六

一行鈴木金作 藤江永次 小川 泰

己に三月私とIミ二人で出かけたのだが數日來の嵐の後で一四〇〇米の地點で追返されてしまつた。深いガスの爲に二日目の夕方僅にあの切立つた美しいピークの雄姿に接することが出來た丈であつた。

それ以來私の心は此山に捕へられて了つた。

五日の午前六時私達は再び山部の人となつた然し此日も山は全く下迄其の姿をかくして居た。

線路傳ひに廿五線へ向ふ。廿五線の突當りの尾根から五六町手前の百姓家が宮本の家だ。私は入口に立つて

『伯母さん又來た』

ご聲をかける。中には伯父さん一人切で爐端で煙草を吹かして居た伯母さんは上蘆別の息子の家へ行つて留守だと云ふ。伯母さんの愛猫「チヨマ」君が爐端にうづくまり目を光らして此不意の侵入者を眺めてゐた。

荷物を軽くして直ぐ出かける豫定であつたが皆のコンデイションは天候とのために暫く休むことに決した。やがて伯父さんは晝飯には馬肉の煮たのがあるから勝手に出して食ふが好いと云ひ置いて仕事に出かけてしまつた。

かくて此の家は四人の大びらな休息所となつたのだ。FミとSは碁盤を引出して五目並を始めた。私とOさんは爐を挟んで向ひ合つて話し始めた。話好きで世間通のSが色々面白いことを言つて皆を笑はせる。

ガスは中々に晴れない。風は真南に物凄く吹付ける。やがて午後三時になる。吾々は最初の豫定を變更する止なきに至つた。三時頃から尾根の取付で畑をやる。夕方になる。未だ天候が變らない。明日のことが心配になる。然し別に急がしい体でもない。二日でも三日でもゆつくり待たうと思ふ家に歸ると伯母さんが歸つて来て居た。聞けばほんの歸つた許りだと云ふのに最う急がしさうに夕飯の仕度をして居る。よく働く伯母さんだ。

明日の準備をしてから又一しきり伯父さんを中心に話がはづんだかくしてたのしい一日は暮れた。四時半頃Fの太い聲に心好い眠から覺された。風は昨日と大した變はないが窓からは無数の星がまたゝいて居る。

『頂上が見える』

Fが外からさなつたので出て行くと全くの青空だ。ピークの眞黒い姿がハッキリト中空に浮び目を轉ずれば十勝連山がボンヤリ暗黒のヴェールに包まれて居る。

今日は暗れる私は無生に喜んだ

午前六時半四人は廿五線の尾根の取付に立つた切込んだ澤を渡つて向側の尾根に取付かうとしたが急斜面と堅雪との爲に少し登つては滑り落ちるFがスキーを脱いで先に登りザイルで皆を引上げる思はぬところで時間を費して了つた夜はすつかり明はれた雪面に反射する光線は私達にすつか

り汗をかゝせて了つた然し雪がかたまつてしまつたので非常に歩き好い、三月Iと二人でやつた時は粉雪であつたために腰迄ぬかるのを交替に卅分位づつあへぎんぐラッセルをやつて六時間の後やつと一〇八八米の地點に到達したことを思ひ出した。あの時は木々のそよぎだにない柔などんよりと曇つた日であつた。深い淋しさをしみじみ味ひつゝ二人は此の沈黙の中に全く融和された音もなく二人の身体は上へ上へ運ばれる。

『代らうか』

『未だ好い』

簡単な會話に顔を見合せてほゝ笑む。二人の心は見えざる糸につながれて居るのだ何を多く語る必要があらうか。

物凄く風のうめきに再び現在の自分へ引戻される見上げれば蘆別から鉢盛への屹立した美しい尾根が紺碧の空にクツキリミスカイラインを描いて其上を純白な雲が東から西へと飛んでゆく。あの雲が頂上で足を止めて曇るのではないかとハラ／＼する、八〇〇米のあたりでバンをかちりながら四方を見渡す實に好い天氣だ。十勝石狩富良野岳の澤の凹みが見え、ハッキリ見える去年石狩岳をやつたFは感激深けにあれが石狩で其の右の方がオトブケの澤だと云ふ。澤一つこえた右側のアシユツペツの尾根には植林でもした様に秩序好い混森林が心を引く。

九時半一〇八八米の頂上に立つ、風は益々激しくなる上迄行けるかしらん少し不安になつた一同頂上の少し下のところ

で風を避けて食事を取つたやがて最後の尾根に進む。コースは依然として樂だ吾々は時々襲つて来る列風と舞上る雲の塊りを避るために斜面に体をねせて待たなければならなかつた足を上げるとスキーが風にあふられる。十一時三十分鞍部着此處で一同はスキーを脱ぎスタイグアイゼンとはきかへるスキーを立て、それをリツクサツクをしばり付け頂上に向ふ木一本ない急斜面は波形の堅雪でスタイグアイゼンの齒が氣持よくさゝつてゆく先頭のFとSが先に肩のところへ寝ころんで居る追付いて肩からヌーツと頭を出す

すと頂上が眞正面に立つて居る。肩の右手は鋭いギヤツプをなして夫婦岩の方へ續く、北海道では珍らしい黒ずんだ岩が眞白な雪の中から頭を出して到るところに散在してゐる時折物凄しい雪崩の音が遠くから魂をおびやかす。肩から少しおろして四人はしつかりとザイルで体をしばり合せた私たちの取つた尾根が風陰であるので吹上げられた雪がたまつて上の雪はまたつたが下が堅雪であるためともするこ上層の雪と共に足をさらはれさうになつた。

實な歩みは尙ほ續けられる。頂上は眼前にある。最後の數十米が無限に長い行程の様に思はれる。

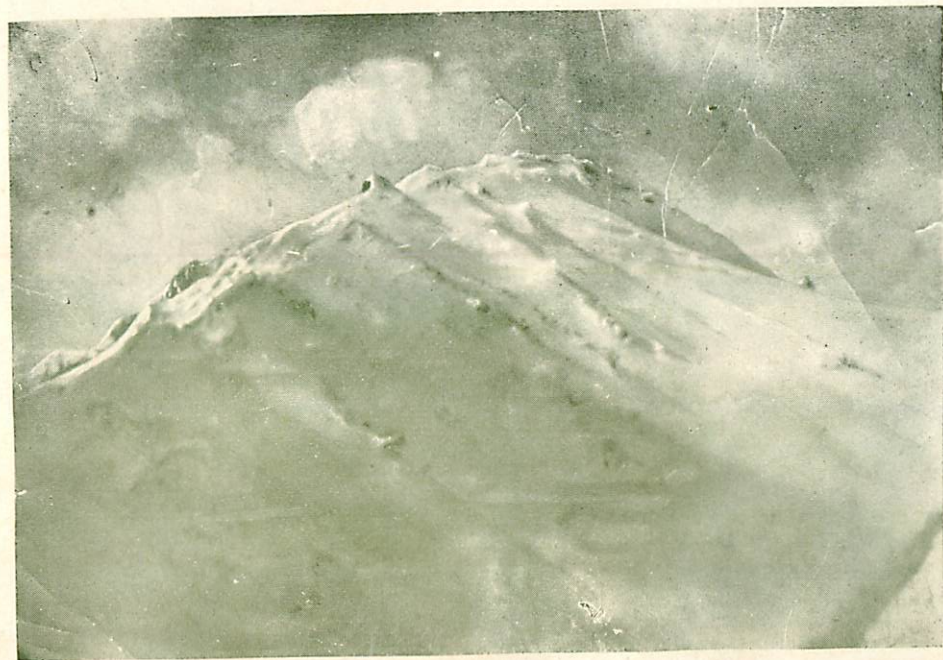
五〇分。

恵まれた吾々は遂に三角標を抱くことが出来たのだ。一時私達の希望は遂に達せられた無言の中に見合す顔には明に満足の色がひらめく、三人は三角標の下にしつかりと抱き合ひFが寫真をとる。風は益々激しく數分の間に私達の手袋は棒の様に氷りついて了つた。長居は危険だ、名残をのおしみつゝ再び元へ引返す。

再び鞍部へ付いた時今迄の緊張のゆるみに可成の空腹を感じた。四人はスキーを中に吹さらしの中で車座になつて食ほる様に午食を取つた。

鞍部を發したのはやがて四時に間もない頃であつた。之から一〇八八米まではボーゲンを愛する者に最も好い斜面なのだ然し今日はクラストの爲に滑降の途中時々スキーが雪の中へ落込んで前にのめりさうになりスキーは氣味悪い音をたて、きしむ。私達は時々立止まつて大きな溜息を付かなければならなかつた。然し三月來た時には全くの粉風であつたので音も無く二人の体は前になり後になり右へ左へさ心地よきスキータンツエンを享樂したのだつたが。

一〇八八米へ着いた時は五時を少し過ぎて居だ残りの食物を平けて一氣に籠へと下る風は屈いた。



東面より見たる芦別岳

I 生

日が沈むころ私達はヒヨロ／＼になつて麓の丘の上に立つた。一、二時間、動きは心のゆるみに激しい疲を感じさした然し將に暮んとする壯大な偉觀に魅せられた私達はしばし其場を動かうともしなかつた。

幾度來やうと幾度見やうと此のあるが儘の自然は決して私達は飽せはしない。一度山の神祕に魅せられた者には例へそれが小さな計畫であつたにせよ自然に歸る其自身がすべての喜びすべての満足ではあるまいか。

空が眞赤になつたピークは紫色に染つて私達を見下して居る山部の村からは平和にすぎし一日を象徴するかの如く煙がゆつたりと登り家へ急ぐ馬子が雪の彼方へ遠ざかつてゆく歌はふ心から歌はふ。

萬象が再び沈黙の夜に入つて行く頃私達は爐端に長くのび切つて一日の勞を休めたSは伯父さんとしきりに話して居る。

『よおけ金使ふてきゆ／＼いふ目に合ふてまあ三角標まで行けたらまだえゝが、毎年々々途中で戻つて來て、面白い道樂もあつたもんやな』

Sは其に色々説明を加へて居たが伯父さんは又口を切つた『一体お前さんがたが何ほ苦勞して頂上へ行たからてそれ切のことやろ』

『まあそんならんだね』

とSが云ふ

『そお云はれゝばわしが山で一日中汗をかき／＼兎を追ひまはすのこ何こか似たところがあるわい見付ける迄山をうろ／＼するのが樂みで打つて殺してもたらそれ切や。

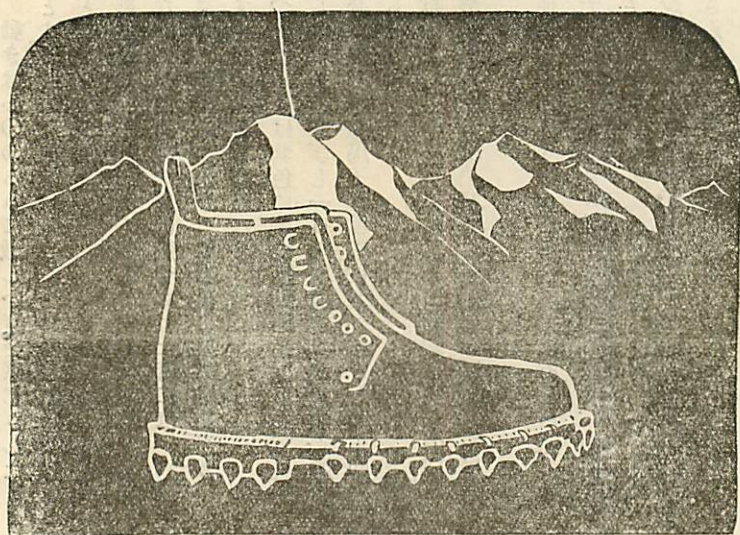
兎の一匹二匹持ていんだて何になるもんか。わしはな兎を見ると先ず足を打つて一打で殺したら最う面白い手負になつたのを無中で追かけるのやまあかう云つたもんかなアハ、ハ、ハ、』

晚餐の酒がまはつて來た伯父さんの赤黒い顔には若々しい生活力のひらめきがあつた。自然の中に生れ自然の中に育つて來た純な人の聲は私の魂の奥底に鳴り響く。

やがて終列車の時刻に間もない頃思ひ思ひの感慨にふけりつゝ星一つない夜をラテルネの光に停車場へ急ぐ。

附記。蘆別岳はたしかに北海道に於て記憶さるべき山の一つであると思ふ。岩と氷に屹立したその山容は一才他に求められない。十年の三月初めて山頂を極められて以來毎年一二回の登山が試みられたがいづつも失敗に終つてゐた。今年も三月の上旬と下旬の二回の試みに失敗した。最初は深雪と吹雪に悩まされ、第二回目は天候は申分なかつたが、一行の躰のコンディションが悪くて惜しい處で引きかへした本號に掲載された寫眞はその時のものである。そして四月I達に依つて再び山頂を極められたのである。

(編者誌)



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石川電

番七二一六京東替振

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

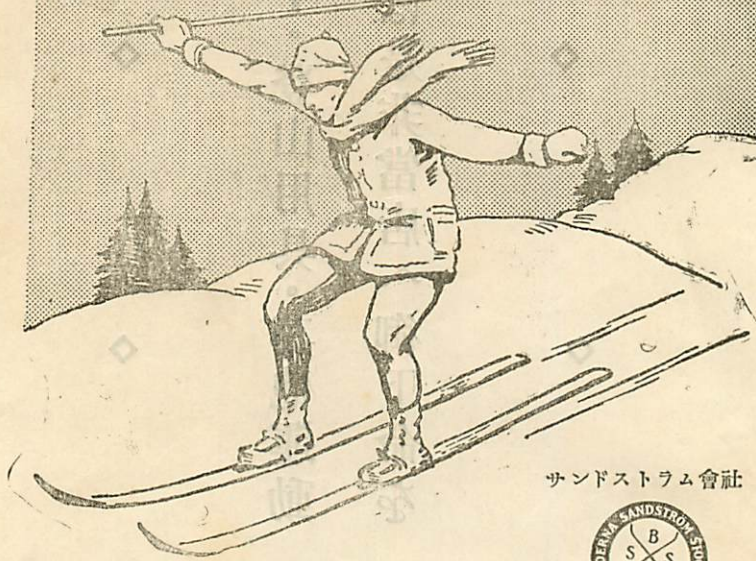
小樽市穂穂町大通

梅屋運動具店

電話八六九番 振替小樽七〇番

Mizuno

SPORTING GOODS FOR WINTER



サンドstrom 會社



瑞典サンドstrom 會社製

日本總代理店

スキーが新輸着致しました

同社製品は長くも

秩父宮殿下

の御下命の榮を賜はりたる逸品にして又世界的山岳家として我國の權威たる

榎有恒氏

の御賞讃品にして又御愛用品でございます。

美津濃特製スキー……………九圓ヨリ十七圓マデ

東京支店
神田小川町
神戶支店
三宮路切南

東洋最大 専門大商店

美津濃

工場大阪浦江町 卸部大阪淀屋橋

本店
大阪淀屋橋
大阪南支店
日本橋四

會 告

讀者諸彦の深厚なる御援助に依りましてここに

第四年目を迎へることが出来ましたことを感謝致します。本號よりは本誌をしてより一般的のものたらしめたいこいふ希望から頁数を増しましてそれに原因する定價の改正を防ぐ爲に紙質を落しました。皆様の御了解をお願いする次第であります。どうか舊に倍した御助力を賜はらん事を御願ひ致します。

なほ第二年目(自十六號)至二十六號合本及び第三年目(自二十七號至三十七號)残本が御座いますから御所望の方は御申込下さいませ。各一部參圓六拾錢で御座います。

六月一日

札幌市北六條西六丁目

山こスキーの會

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂けません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝはらず雑誌の代價は頂きます。

大正十三年五月三十日印刷

大正十三年六月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 赤 松 勳

印刷兼 發行者 長 谷 川 敦

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

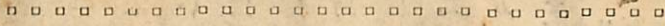
札幌市北六條西六丁目

發行所 山こスキーの會

振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 33. Julio 1924. Sapporo. Japanujo.

MIMATSU WINTER SORTS OUTFIT



MOUNTAINEERING EQUIPMENT &
PATENT FOLDING CAMP FURNITURES.



Sporting Goods
Mimatsu Tokyo
Japan

會社美滿津商店

東京本御赤門前·電話小后川-845-2071.

大正十三年五月三十日印刷納本
大正十三年六月一日發行
大正十三年七月二十日第三種郵便物認可

山とスキ!

第三十八號

定價金參拾錢